

2023年(令和5年)7月27日

病院長からの一言

～病院長就任にあたって～
患者第一主義弘前大学医学部
附属病院長 袴田 健一

4月1日付けで附属病院長に任命されました袴田健一です。どうぞよろしくお願いいたします。私は、1985年に本学を卒業後、学外関連施設に勤務した6年間を除き、30年にわたり本院で勤務してまいりました。2008年以降消化器・乳腺・甲状腺外科、小児外科の科長、福田病院長(現学長)時代には手術部長、大山前病院長の下では副病院長(医療安全・経営担当)を拝命しております。古い話になりますが、本院で使用しているDPC入力システムの開発にも関与いたしました。出身は三戸町。先祖は南部藩で馬の世話をしていたようです。北は函館から、南は大館・秋田まで、旧第二外科の関連病院で手術に赴き、青森県全40市町村で診療や検診を行ってききましたので、本院の広域医療圏全体に土地勘のあるところが取り柄です。そのため、現在入院されている患者さんはもとより、遠方から通院されている外来患者さんや入院治療を待ち侘びている患者さんに、本院の優れた医療をできるだけ早くかつ多く届けたい、その環境を整えたいとの強い想いを有しております。

さて、新型コロナウイルス感染症が5類感染症に移行し、社会がwith coronaに向けて動き始めました。これからはコロナが巷にありふれる状態を受け入れながら、

病院機能の維持を図る必要があります。今まで以上に基本的感染対策が重要となりますので、ご協力をお願いいたします。

現在、本院にはコロナ以外にも、医師の働き方改革、各部門の人員不足、非効率な業務の改善、光熱費や物価高騰、財務基盤の強化、教育・研修体制の強化、ハラスメントのない職場づくり、接遇の強化、危機管理体制の整備、特定臨床研究の推進、国際化の推進、地

域医療支援、遠隔医療の推進など、対応すべき多くの課題があります。中でも、コロナ禍で落ち込んだ病院の財務経営を立て直し、本院のミッションである地域社会への高度医療の提供を十分に果たすためには、業務内容の見直しや効率化、適正な人員配置による職員の労務負担の軽減と、病床稼働の促進による増収を同時並行で進めることが喫緊の課題です。実は、全国の国立大学病院が同様の課題を抱えており、どの大学病院も業務改善と病床稼働促進という、ともすれば二律背反な課題に対して懸命に取り組んでいます。参考になる事例も多くあり、本院においても職員の皆様と一緒に、知恵を出し合いながら課題を乗り越えていきたいと考えています。

表題に掲げた「患者第一主義」は、かつて小野慶一先生(旧第二外科教授)が本院病院長就任のご挨拶の中で、教職員に求められる姿勢として記載された言葉です。至極当然のことですが、効率性や医療者側

の都合を追求しすぎますと、時に見失いがちになるのも悲しい哉事実です。安心、安全な高度医療の提供という我々のミッションを果たすために、自戒も含めて、職員の皆様と共有したいと思い、ご紹介させていただきました。今後ともよろしく願い申し上げます。

さて、新型コロナウイルス感染症対応に明け暮れた3年間でしたが、5類感染症への変更に伴い、社会がwith coronaに向けて動き始めました。今後は、コロナが巷にありふれる状態を受け入れながら、病院機能の維持を図る必要があります。大きな犠牲と苦勞の末に蓄積した知恵を、コロナ禍の出口戦略や次の新興感染症や大規模災害への対応に活かすため、新たに危機管理・BCP担当副院長職を設け、花田裕之教授にご就任いただきました。アドホックのコロナ会議から、機動力と実効性を兼ね備えた常設の危機管理組織へ移行し、危機・災害に強い病院づくりを目指したいと思っております。さら

に、喫緊の課題である働き方改革担当ならびに総務担当副院長には横山良仁教授、病院経営の根幹である医療安全・経営担当副院長には石橋恭之教授にご就任いただきました。今後10年、20年先を見据えて経営基盤を強化したいと思っております。また、病院長補佐には、附属病院を発展させるために整備すべき課題別に、病院における教育・研修担当に櫻庭裕文教授、地域医療・遠隔医療推進担当に掛田伸吾教授、接遇・ハラスメント・臨床倫理担当に田坂定智教授、国際化担当に齊藤敦志教授、勤務環境改善・男女共同参画担当に玉井佳子教授、業務改善・DX担当に佐々木賀広教授、特定臨床研究推進を含む研究担当に新岡文典教授、看護担当に井瀧千恵子看護部長にそれぞれご就任いただきました。総勢12名の執行部体制で病院運営に臨みたいと思っております。教職員の皆様におかれましては、病院運営へのご理解とご協力を何卒よろしくお願いいたします。

各診療科等の紹介

【放射線部】

放射線部は、昭和27年4月に中央レントゲン室として発足以来、70余年にわたり本院の放射線診療を担ってきました。現在26ある中央診療施設の中で最も大規模な部門のひとつであり、中央診療棟の1階から地下2階までの3フロアにわたって主に診療を行っています。診療各科共通の放射線および放射線同位元素、核磁気共鳴による検査、診断、治療を行うことを目的としており、具体的な診療内容としては、(1)一般撮影、透視検査部門、(2)血管撮影部門、(3)CT撮影部門、(4)MRI撮影部門、(5)高度救命センター、手術部部門、(6)RI診断部門、(7)放射線治療部門、(8)放射線管理部門と非常に多岐にわ

たっており、特定機能病院である本院をまさに陰で支える重要な部門です。部長の青木昌彦(放射線腫瘍学講座教授)を筆頭に、副部長1名、技師長以下診療放射線技師41名、事務職員3名で構成されており、これに、放射線部・光学医療診療部に所属する看護師らに加わり、放射線診断科・治療科医師をはじめとした診療各科の医師らと協力して業務に携わっております。

近年の放射線医療機器の発展は目覚ましく、本院でも更新の際には最新機種を導入しております。現在は3台のマルチディテクター



CT(320列、256列、80列)、3台のMRI(うち2台は最新の3テスラ装置)、核医学部門ではSPECT/CT、PET/CTを各1台有しており、多種多様な検査依頼に応えています。特に最新のCTには人工知能が搭載されており、ディープラーニングによる画像再構成が可能です。これにより、低

被ばくでもノイズを抑えた高画質が実現され、更なる診断能向上が期待されます。放射線治療部門では2台のリニアックを用いて通常の放射線治療のみならず、体幹部定位放射線治療、強度変調放射線治療、画像誘導放射線治療などの高精度放射線治療も積極的に行っています。この2台のリニアックは10余年の役目を果たし、今年度以降最新鋭の放射線治療装置に順次更新される予定です。また、放射線安全管理もわれわれの重要な責務であり、放射線機器の管理、放射線安全教育、職員の被ばく管理、検査の被ばく低減等にも引き続き注力してまいります。

今後も皆様のご要望とご期待に応えるべく、各診療科とも協力して本院の診療に貢献してまいりたいと考えておりますので、引き続きご支援を賜りますようよろしくお願いいたします。

(放射線部副部長 畑山佳臣)

令和5年度体制スタート!

今年度は、副病院長に産科婦人科学講座 横山良仁教授、整形外科科学講座 石橋恭之教授、救急災害・総合診療医学講座 花田裕之教授が就任しました。

また、病院長補佐に消化器血液内科学講座 櫻庭裕文教授、放射線診断学講座 掛田伸吾教授、呼吸器内科学講座 田坂定智教授、脳神経外科学講座 齊藤敦志教授、輸血・再生医学講座 玉井佳子教授、医学医療情報学講座 佐々木賀広教授、薬剤学講座 新岡文典教授、看護部 井瀧千恵子看護部長が就任しました。(総務課)

副病院長
横山 良仁
産科婦人科学講座
教授副病院長
石橋 恭之
整形外科科学講座
教授副病院長
花田 裕之
救急災害・総合診療医学講座
教授病院長補佐
櫻庭 裕文
消化器血液内科学講座
教授病院長補佐
掛田 伸吾
放射線診断学講座
教授病院長補佐
田坂 定智
呼吸器内科学講座
教授病院長補佐
齊藤 敦志
脳神経外科学講座
教授病院長補佐
玉井 佳子
輸血・再生医学講座
教授病院長補佐
佐々木賀広
医学医療情報学講座
教授病院長補佐
新岡 文典
薬剤学講座
教授病院長補佐
井瀧千恵子
看護部長

お元気ですか?あなたが好きな岩木山はいつも雄大で変わらない強さを教えてくれています。特別な話題を知らせてくたくて手紙を書きました。2024年度からいよいよ働き方改革が始まります。この改革は医師の働き方の大きな分岐点になりそうです。

一人前の医師になるためにはスキルを磨くため長時間働いて、時間にとられず修練するのが当たり前。伝統的な働き方だと、週末や休日でも仕事だった。あなたによく迷惑をかけましたね。一人前の医師になるために長時間勤務は苦にならなかった。でもこの働き方は疲れやストレスで健康や仕事の

質に影響が出るのかな。あなたの働き過ぎよという意見に反発したけど長時間の仕事は当然だった。家族や親しい人たちと過ごす時間の確保も働き方改革の狙いなのかな。

年間の時間外労働時間は細かな規則はあるけど1860時間が上限、将来的には960時間以内を守ること。これは一般勤務者と同じレベル。国の指令は患者の命も守って自分の命も守りなさいということになるのでしょうか。でもね、無理やり長く勤務させられるのと時間が過ぎるのを忘れるくらい進んで仕事をするのは違うような気がする。結局やりがいじゃ

先憂後楽

いよいよ働き方改革が始まります



産科婦人科 横山良仁

ないのとあなたがいつか言っていたね。それに賛成。

でも働き方改革はとにかく実行しなければならぬ。医師数が少ないこの地方で、決められた労働時間で充実した医療を提供するという難問にどうしたら良いか?遠隔診療、遠隔手術のようなリモートが一つのアイデア。タスクシフト、フレックスタイムも考えられるね。サイバネティック・アバターを政府は本気で考えているようだ。なにそれ、とあなたの呆れたような声が聞こえる。同感。でも限られた時間の中では少なくとも効率化は必須かな。上下関係は邪魔になるし、医師同士の情報共有が密になるということはメリットかもしれない。医師のもう

一つの顔は研究者/教官でもあること。基礎実験をして論文を書いて、学生講義の準備をして。自己研鑽になるのだから長い拘束時間は変わらないのかもしれない。愚痴ってしまったね。

医師の適度な休息、リフレッシュ、良好なメンタル、これらは全て患者の利益のためにということが働き方改革の肝だね。変わらない強さもいいけど変わる勇気も素敵だと思わない?何を今さらと笑うかもしれないけど、いつまでも元気でいてねというあなたの言葉、大切にします。では、いつか、どこかで。

第15回弘大病院がん診療市民公開講座を開催

弘大病院がん診療市民公開講座は今回で第15回を迎え、令和5年2月11日～26日にかけてオンデマンド配信で行いました。

今回は「妊孕性温存」をテーマとし、初めに産婦人科の福原理恵先生より「妊孕性(にんようせい)温存治療ってなに?」をご講義いただきました。妊孕性とは妊娠するために必要な力のことです。がん治療の副作用の中には精子が作れなくなる、卵子の数が減るといったことがあります。治療前に妊娠の機能を温存するのが「妊孕性温存」です。男性は精子凍結が行われます。採精が難しい方は精巣内精子採取術を行うこともあります。女性は卵子凍結、胚凍結、卵巣組織凍結の3つの方法があり、対象年齢やパートナーの有無等によって選択されます。これらは保険適応外となるため経済的負担もありますが、現在は助成金制度も開始されました。当院産婦人科では妊孕性に関する相談に応じ

ている、とのお話でした。

次に乳腺・甲状腺外科の西村顕正先生より「乳がん治療を受けるA子さんの悩み～妊孕性温存を考える～」についてご講義いただきました。乳がん治療の中で化学療法とホルモン療法が妊孕性に影響があります。治療選択はサブタイプ分類によって決定されます。例としてトリプルネガティブで抗がん剤治療をするA子さん、ホルモン受容体陽性でホルモン療法をするB子さんについてお話いただきました。当院では乳がん治療開始前に挙児希望の有無を確認し、希望がある、悩んでいる場合は産婦人科受診を勧めています。妊孕性温存を行う際は産婦人科と連携し治療の遅れを生じないようにしている、とのお話でした。

今回は65名の方がご視聴くださいました。今年度は対面で開催予定ですので是非会場へお越しください。

(がん相談支援センター)

この人 No.14

本院の多方面で働くスタッフを紹介いたします。



院内保安員
小田桐薫さん

昨今、医師や看護師などの医療従事者に暴言・暴力をふるう、理不尽な要求を繰り返すなど、いわゆるモンスターパシエントの対応に苦慮する医療機関が増えており、本院でも、診察室等で大声を上げる、診療に納得いかないといった診察室から出ないなどの問題行動を取る患者さんやその家族への対応が増えてきています。これにより、他の患者さんへの影響や、病院の診療等に支障をきたすほか、対応にあたる職員の精神的苦痛も大きくなっています。

このため、平成27年より、患者さんに良質な療養環境を提供するため、また職員の安心・安全等の観点から、トラブル対応のノウハウや法律の知識を持つ警察官OBを院内保安員として配置しています。本年4月から3代目となる小田桐薫さんが採用されました。

小田桐さんは、長年警察の幅広い業務を経験されており、保安業務は適任の方といえます。

また、とても気さくで話しやすいお人柄ですが、いざトラブルが発生したときは冷静沈着に対応し、職員にも状況に応じた適切な助言を行うなど、とても頼もしい存在となっています。

保安員は、医療安全推進室付けですが普段は医事課にあり、定期的に院内巡回を行うほか、職員からの応援要請には迅速に対応します。また、毎朝、玄関総合案内で患者さんの受付対応も担っています。

職員が安心・安全に医療を提供することで、患者さんも良質な医療を受けることができます。その環境づくりのため、小田桐保安員は必要不可欠な存在となっています。(医事課長 奈良昌晃)

弘前大学医学部附属病院へのご寄附、心より御礼申し上げます

ご氏名の掲載をご承諾いただいた方に限り、ここにご芳名を掲載させていただきます。

今号では、令和5年2月から令和5年4月末までの間にご入金を確認させていただきまして公表させていただきます。(経理調達課)

寄附者ご芳名 岡本 道孝 様
匿名希望 1人

※掲載の同意をいただいた方以外は、匿名希望とさせていただきます。

病院職員への「感謝の夕べ」を開催



弘前大学医学部附属病院では、新型コロナウイルス感染症の感染法上の位置付けが「5類感染症」に移行したことに合わせ、令和5年5月10日(水)に袴田健一病院長から同院で働くスタッフ等に対

して感謝の意を伝える「感謝の夕べ」を開催し、約200人が集まりました。

同院外来診療棟1階中央待合ホールにて行われたイベントでは、コロナ禍の県内医療を最前線

で支えた病院のスタッフ及びその家族に対し、袴田健一病院長、福田眞作学長、櫻田宏弘前市長よりそれぞれ感謝の言葉が伝えられ、ゲストとして登場したボーカルユニットのライスボールによるミニライブが催されました。ミニライブでは、ライスボールの地元である弘前市をイメージした楽曲など、アンコールを含め8曲が披露されました。イベントの参加者は楽曲に合わせて手拍子を打つなど久しぶりの催しを楽しみ、コロナ対応の節目を迎えたことを実感している様子でした。

(総務課)

緩和ケアWeb公開講座を開催

緩和ケア診療室では、津軽地域で働く医療従事者を対象に、緩和ケアに関する公開講座を毎年開催しております。新型コロナウイルス感染症予防の観点から3年前よりWeb公開講座としており、今回は3回目の開催となりました。

Web公開講座は毎回2本立てで企画しており、今回は『その薬、痛みを効く?—鎮痛補助薬—』と『過ごしたい場所で過ごすために—薬剤師にお願いしてみよう—』がテーマでした。在宅療養に関する内容であったため、今回は地域で活躍する医療従事者の受講が増えました。受講生からは、「オピオイドだけでは解決できない痛みがあり、痛みの治療の薬剤

について知識が広がった。」という感想や「多職種に対する理解が深まった。」などの感想をいただき、有意義な公開講座になったと認識しております。

Web公開講座は自身のタイミングで受講でき、繰り返し視聴できるというメリットがあります。しかし、その一方で、事例や体験談の共有、その場での質疑応答ができないという点もあるかと思っております。患者様・ご家族がよりよく過ごせることを願い、日々取り組んでいるみなさんと一緒に緩和



ケアについて考える場を設けるべく、今回は会場での開催を検討しております。みなさんの学習ニーズに沿った公開講座を企画・開催したいと考えておりますので、多数の参加をお待ちしております。よろしくお願いたします。

(腫瘍センター：緩和ケア診療室)

青森県感染対策協議会(AICON)市民公開講座を開催



まだ新型コロナがくすぶっていた時期でしたが、一般の方の感染対策の教育を目的としたAICON主催の市民公開講座を開催しました。AICONとは、青森県の30施設以上の医療機関が加入している、Infection Control Teamのネットワークです。あまり感染対策が十分でない施設(小規模な病室や老健施設)において、多剤耐

性菌(過去にはVRE等)や今回の新型コロナ等のアウトブレイク(クラスター)が発生した時など、AICONのメンバーがその医療施設に出向き、教育・アドバイスをします。また、ICTのある基幹病院間同士で、感染対策についての情報交換等も行っています。AICON市民公開講座は、感染対策を一般の方にまで理解してもら

う目的で開催され、今回は「～学ぼう! ウイルス感染症対策について～」というテーマで行いました。前半は歴史上世界的にパンデミックな流行となった感染症についてのレクチャーで、ペスト(黒死病)、スペインかぜ(当時の新型インフルエンザ)、今回の新型コロナウイルスについて解説を行いました。後半では、ノロウイルス患者等が嘔吐してしまった場合、どのような消毒や扱いで清掃すれば二次感染を防げるのかの実習をしていただきました。今後も市民の皆様へ、感染対策の常識や正しい理解を啓蒙していきたいと考えています。

(感染制御センター 齋藤紀夫)

第29回アレルギー週間市民公開講座を開催

アレルギー週間は、IgEを発見した石坂博士の功績にちなんで定められたもので、毎年2月17～23日の期間中に日本アレルギー協会の支援により全国各地でアレルギーに関する種々の催しが開催されます。弘前では、コロナ禍でしばらく中止していましたが今年は3年ぶりとなる2023年2月23日に、中三弘前8階のスペースアストロにて2時間にわたり市民公開講座を開催することができました。弘前大学医学部附属病院でアレルギー診療に関わる5診療科の協力のもとに総合司会を松原(耳鼻咽喉科)が務め、糸賀正道先生(呼吸器内科)と赤坂英二郎先生(皮膚科)の司会の下に、「スギ花粉症の克服に向けて」を高畑淳子先生(耳鼻咽喉科)から、「アレルギー性結膜炎の対策」を工藤孝志先生(眼科)から、「食物アレルギーの原因と予防」を相澤知美先生(小児科)から、それぞれ30分の時間でわかり易くお話しした

きました。講演の後はQ & Aコーナーもあり参加いただいた約40名の市民の皆さまからアレルギーに関する数多くの質問が寄せられ非常に有意義な会となりました。

ご協力いただいた皆様にご場を借りて御礼申し上げます。来年度以降も継続する予定です



ので、今後もご支援のほど宜しくお願い申し上げます。

(耳鼻咽喉科頭頸部外科 松原 篤)

【編集後記】

南塘だより第110号をお届けいたします。お忙しい中、原稿をお寄せいただきました皆様には心より感謝申し上げます。

さて、5月8日より新型コロナウイルスの感染症法上の位置付けが5類に移りました。まだまだ油断はできませんが、本号の「感謝の夕べ」のような、明るい気持ちになれる行事がこれから少しずつ増えていき、それを南塘だよりで皆様にお伝えできると願っています。

また、令和6年度からは、医師の働き方改革が施行されます。労働時間の把握がこれまで以上に重要になりますので、医師の皆様には、「毎日JOY!」を合言葉に、「Dr.JOY」の持ち歩き等をよろしくお願い申し上げます。

(病院広報委員会委員 総務課 秋元弓子)